



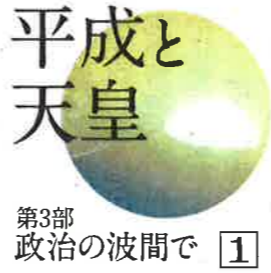
2017年(平成29年)
10月30日
月曜日

天気	6	9	12	15	18	21(時)
東京	☀	☀	☀	☀	☀	0
横浜	☀	☀	☀	☀	☀	10
千葉	☀	☀	☀	☀	☀	0
さいたま	☀	☀	☀	☀	☀	0
札幌	☁	☁	☁	☁	☁	70
仙台	☀	☀	☀	☀	☀	30
名古屋	☀	☀	☀	☀	☀	10
大阪	☀	☀	☀	☀	☀	0
福岡	☀	☀	☀	☀	☀	30

朝日新聞東京本社
本日の編集長=立松朗
〒104-8011東京都中央区築地5-3-2 電話03-3545-0131 www.asahi.com

訪中 陛下「よかった」

実現に曲折徹した親善



第3部 政治の波間で ①

「中国訪問はよかった」
皇居・御所で開かれた数年前の食事会の席上。天皇陛下は1992年の中国訪問を振り返り、宮内庁関係者にそう明かした。

天皇陛下が皇后さまと中国を訪れた92年は、日本と中国が国交正常化20年を迎えた節目。歴代天皇で初めてとなる訪中の実現には、紆余曲折があった。

日本政府には、天皇訪中で昭和から引きずる歴史問題に区切りをつけたい思惑があった。「天皇訪中は最強の外交カード」(外務省当局者)と捉える向きもあった。だが「天皇を政治利用すべきではない」という意見のほか、政府・自民党内にも、戦争責任や賠償問題の再燃を危惧する立場が

らの慎重論は根強く、調整に時間がかかった。

一方、中国には多くの犠牲者を出した89年の天安門事件で国際社会から孤立した状況を打破したい思惑があり、繰り返し天皇訪中を求めた。当時の中国外相・錢其琛氏は回顧録で、天皇訪中を「対中制裁を打破するうえで積極的な作用を發揮した」と振り返った。

だが、陛下が「よかった」と語ったのはこうした政治的文脈とは一線を画し、自らの訪問で少しでも友好関係に前進があればというお考えのようだった」と発言を直接聞いた宮内庁関係者は言う。表情や話し方から、親善の意義や手応えを得たのだと感じ取ったという。

は、沿道から「ホワンイン(歓迎)！」の声があがった。上海総領事だった蓮見義博氏(84)は両陛下と車で移動中、天皇陛下から何度も「もう少しスピードを落としてください」と求められた。暗い道路にさしかかると、遠方にいる人たちにも見えるように、と室内灯をつけた。「外に出られるといいですけどね」とも語ったという。

訪中の評価は今も分かれる。天皇陛下自身、周囲に尋ねたことがある。外務省アジア局長として訪中に関わった池田維氏(76)は2000年、両陛下のオランダ訪問時に駐在大使として朝食を共にした席で、陛下から「中国訪問はよかったと思いませんか」と聞かれた。その2年前、来日した江沢民国家主席が日本の歴史認識について批判し、両国関係がぎくしゃくしていた時期だった。陛下が、両国の関係を気にかけていることが伝わってきた。

2面に続く

憲法は「天皇は憲法の定める国事行為の権能を有しない」と定めるとも言われる。だが両者はときに近接し、危ういバランスの上に立つ。「平成と天皇」第3部では、皇室と政治の関係を考えます。

戦後処理・戦没者追悼 「皇室外交に丸投げ」

戦後の「皇室外交」は53年、皇太子(現天皇陛下)が英国のエリザベス女王の戴冠式に参列し、欧州などを歴訪したことで、本格的に始まる。皇太子時代の陛下は60年には米国を訪問した。岸信介内閣が日米安保条約改定に合わせて計画し、次の池田勇人内閣で実現。安保改定をスムーズに進める狙いがあると批判され、「政治利用」が問題になった初期の例とされる。戦後の天皇外遊は、71年の昭和天皇の欧州歴

訪が最初だった。エリザベス女王は晩餐会で「両国関係が常に平和だったとは言えない。その経験が、二度と同じことが起こってはならないと私たちに決心させる」と言及。昭和天皇は戦争に触れず、現地で批判を受けた。その後は、75年の天皇訪米、78年の鄧小平・中国副首相来日などの際、「お言葉」で過去の歴史を取り上げるようになる。

平成に入り、天皇の海外訪問は急激に増え、サイパン、パラオ訪問など「慰霊の旅」も加わった。吉田裕・一橋大教授(日本近現代史)は「皇室外交の歴史は、戦後処理や戦没者追悼の問題について政治がその責任を放棄し、天皇に丸投げしてきた歴史とも言える」と警鐘を鳴らす。

「平成と天皇」企画はこれまで、4月に「プロローグ 退位をめぐる攻防」、5月に「第1部 退位これから」、7月に「首相経験者に聞く」、8月に「第2部 平和を求めて」を掲載しました。

「訪中は政治利用」 激しい反対論

官邸、保守強硬派を半年余説得

と成天皇
平天

第3部 政治の波間で 1

1面から続く



中国を訪れ、北京市郊外の万里の長城「八達嶺」を歩く両陛下
—1992年10月24日

天皇訪中

1992年10月23～28日、中国政府から招請を受け、天皇、皇后両陛下が訪中した。歴代天皇で初めて。「政治利用」との批判もあり、宮沢喜一首相（当時）は談話で、訪問目的を「友好親善」と強調した。陛下は歓迎晩餐（ばんさん）会で「我が国が中国国民に対し多大の苦難を与えた不幸な一時期がありました」と日中戦争に触れ、「私の深く悲しみとすると」と述べた。

この政府の世論調査はでっ

今も不満くすぶる

当時、自民党最大の支持団体の一つ、日本遺族会は「中国などへの外交的配慮から首相の靖国公式参拝が中断した。現状を放置したままでは祝福して送り出せない」と主張していた。こうした声に押され、宮沢首相が天皇訪中後、靖国神社を参拝したとされる。

「朝早く一人で参拝したと周辺から聞いた」。石原氏はそう証言する。時期は定かでないという。「保守派に対するジェスチャーではなく、自身の心の問題として対応されたのだろう。英霊への報告という気持ちもあったのかもしれない」。当時の政府関係者の間では天皇訪中は成功だったとの評価が定着する。谷野氏は言う。「あの時、天皇、皇后両陛下のご訪問を通じて日中の友好親善が深まった。それを政治利用と言うなら、両陛下はどの国にもいらっしゃれなくなる」。だが、保守派には今も不

干渉した▽天安門事件以降、人権抑圧を強める中国への訪問は世界各国から誤解を招きかねない——などとして反対を決議した。5月には「日本会議」の前身である「日本を守る国民会議」などの代表者らが、宮沢首相（同）に反対を申し入れた。底流には「朝貢外交になる」との反発もあった。

加藤紘一官房長官（同）は一時、「天皇訪中は難しい。もうダメだろう」と漏らした。高校や外務省で加藤氏の先輩だった谷野作太郎・内閣外政審議室長は「今やめれば宮沢内閣に大変な傷が付きまします」と強い口調で論じたという。その時、事務方トップの石原信雄官房副長官が一計を案じた。87年から官房副長官を務めていた石原氏は、昭和天皇逝去の際、皇位継承儀式の一つである「大嘗祭」の公的な位置づけをめぐり、保守強硬派の反対の矢面に立ち、政府方針に賛成・反対両派の意見を聴く場を設定して乗り切った経験があった。「今回

も賛否両論の人たちに思いの丈を語ってもらおう」

92年8月7日、加藤氏は右翼団体「大東塾」の鈴木正男代表（同）、財団法人「大東会館」の学生寮出身で今も皇室問題で保守派に影響力のある大原康男・現国学院大名誉教授、同寮出身の高森明勲氏を議員会館の部屋に呼んだ。石原氏も同席する中、鈴木氏らは「中国は昭和天皇の大喪の礼や天皇陛下の即位の礼にも、外相や副首相をよこした」「7割がご訪中賛成と

1992年、天皇陛下の訪中をめざした宮沢喜一内閣が直面したのは、国内の激しい反対論だった。首相官邸幹部らが異例の「保守強硬派対策」に乗り出し、半年余りかけて訪中決定にこぎ着けた。「皇室外交」の歴史は、政治の責任とは何かを問いかけている。

（鳥康彦、多田晃子、二階堂友紀）

天皇陛下の訪中計画が動き出したのは、92年1月だった。宮沢内閣の渡辺美智雄外相（故人）が北京で、銭其琛外相（同）と会談し、天皇訪中について「累次にわたる招請を多とし、政府部内で真剣に検討する」と踏み込んだ。同年10月下旬の日程も極秘に示された。

天皇訪中は昭和天皇時代からの懸案で、日本政府には「天皇訪中により、日中間の戦後処理を完結させた」との思いがあった。

保守強硬派は反発した。藤尾正行・元文相（同）は自民党総務会で「天皇陛下が政治に巻き込まれる恐れがある」と反対を表明。3月末には「天皇陛下のご訪中延期を願う国民集会」が開かれ、天皇の政治利用につながる▽中国は日本の教科書記述や首相の靖国参拝に

天皇、皇后両陛下の外国訪問 (即位後)

1991年	タイ①、マレーシア、インドネシア	
92	中国②	
93	ベルギー、イタリア、ベルギー、ドイツ、パチカン	
94	米国③、フランス、スペイン、ドイツ	
97	ブラジル、アルゼンチン、ルクセンブルク、米国	
98	英国、デンマーク、ポルトガル	
2000	オランダ④、スウェーデン、スイス、フィンランド	
02	ポーランド、ハンガリー、チェコ、オーストリア	
05	ノルウェー、アイルランド、米国サイパン島	
06	シンガポール、タイ、マレーシア	
07	スウェーデン、エストニア、ラトビア、リトアニア、英国	
09	カナダ、米国ハワイ州	
12	英国	
13	インド	
15	パラオ	
16	フィリピン	
17	ベトナム、タイ	

「朝早く一人で参拝したと周辺から聞いた」。石原氏はそう証言する。時期は定かでないという。「保守派に対するジェスチャーではなく、自身の心の問題として対応されたのだろう。英霊への報告という気持ちもあったのかもしれない」。当時の政府関係者の間では天皇訪中は成功だったとの評価が定着する。谷野氏は言う。「あの時、天皇、皇后両陛下のご訪問を通じて日中の友好親善が深まった。それを政治利用と言うなら、両陛下はどの国にもいらっしゃれなくなる」。だが、保守派には今も不